


 書評

佐藤光源, 樋口輝彦, 井上新平 監訳

米国精神医学会治療ガイドライン コンペンディウム

高橋清久

精神医療・福祉水準の向上へ。実用的ガイドライン

精神医療に携わるものにとって大変参考になる心強い翻訳書が出版された。本書には米国精神医学会 (APA) が作成した 11 の治療ガイドラインが収められている。精神医学的評価法から始まり、せん妄、アルツハイマー病と老年期の認知症、HIV/AIDS 患者の精神医学的ケア、統合失調症、大うつ病性障害、双極性障害、パニック障害、摂食障害、境界性パーソナリティ障害、自殺行動の評価と精神医学的ケアで終わっている。これらのガイドラインはすでに American Journal of Psychiatry に掲載されたものであるが、こうしてまとまった翻訳本が出たことは、わが国の精神医療水準の向上に大きな寄与をするであろう。

ガイドラインの作成過程についての解説によれば、入手可能な文献について厳密で科学的な審査を行い、十分推敲された草稿を広範に審査し、最終的に APA 総会と理事会の承認を得るという厳しい吟味をしている。さらに、できるだけバイアスがかからないようにつとめたことや、いかなる営利団体からも財政援助を受けていないという点を強調している。このようなガイドラインに関する APA の厳しい姿勢が示されている。

ガイドラインは実践上の指針を示したものであり、医学的ケアの基準を示したり、基準として役立てたりするものではないことは本書でも強調されているが、できるだけエビデンスに基づいた情報がふんだんに盛り込まれており、実際の臨床の場で治療方針を決定したり、治療を評価する際には大いに参考になるものと思われる。かつては、米国では使用されていても、わ

が国ではいまだ認可されていない薬剤が多く、この種の米国製のガイドラインが日本では十分には役立たないといったこともあったが、抗精神病薬にみるように本書に記載されている大多数の薬剤が日本でも使用が可能になっており、その点からも本書が実用的になっている。

本書の特徴として通常の薬物療法や精神療法に加えて、心理社会的な対応が社会資源についての解説とともに記載されていることが挙げられよう。たとえば統合失調症における包括的地域生活支援プログラム、家族介入、援助つき雇用、認知行動療法、患者教育、ケースマネジメント、自助グループ等々である。社会資源が十分に整備されていないわが国では本書に記載されているような社会資源を取り入れることは困難であるが、包括的アプローチに次第に関心が持たれ始めているわが国の精神医療・福祉の実践に大いに参考になる内容である。折から、わが国では障害者自立支援法が成立し、2006 年 10 月から施行される。それによって社会資源が充実、整備される可能性が高まってきており、本書は障害者の支援者である福祉関係の専門職にも役立つ書物であろう。

各疾患について、その定義、疫学、自然史、研究の方向なども記載されており、現在まで何がわかっており、何がわかっていないかについても明瞭に記載され、教科書としての機能も立派に果たしている。

わが国の精神医療・福祉の水準の向上のためにも、本書が各種の専門職に広く読まれることを期待する。

(国立精神・神経センター名誉総長)

● B5 984頁 2006 定価15,750円 (本体15,000円+税5%) 医学書院